

インターンシップの取り組みについて

専門・応用課程の取り組み事例

中国ポリテクカレッジ
(中国職業能力開発大学校)

山根 康寛

以下、中国校各科の取り組み事例を記載します。

1. はじめに

中国職業能力開発大学校での16年度インターンシップ取組状況は、15年度の実績・委託先企業の報告書・学生の報告書のデータを集約し、中国校、附属島根校、附属福山校3校のそれぞれ16年度インターンシップに対する取り組み目標、基本姿勢を確認し足並みを揃え目標達成に取り組んでいるところです。

(中国ブロックでは、カレッジ3校の現状の課題問題点を議題に年2回ポリテクカレッジ部会を開催実施しています、そのなかの1つの議題に就職率を意識した取り組みとしてインターンシップを取り上げています。)

16年度目標は、各施設実施率90%以上、期間は10日を基本とし(委託先企業の事情を配慮)、科の内容実情に沿ったカリキュラムで取り組む、2年生を基本的に実施する、企業から苦情が出ないよう学生に対し事前の趣旨説明・言葉遣い・礼儀等の指導をしっかりと行う等話し合いを行いました。

16年度は10月末現在、島根・福山校は100%実施済み、中国校は12月の集中実習期間予定分が残っていますが、現在88%の実施済み率を90%以上に努力を行っているところです。

中国校としての企業開拓・接触・契約等の流れは、実績ある企業に対しては各科職員が対応し、新規開拓は管理職と科職員で訪問、依頼・契約の取り交わし・事務手続き等は学務課が担当するというスタンスで行っています。

2. 各科の取り組み事例

■応用課程 生産機械システム技術科

生産機械システム技術科では、2月から企業訪問などの就職活動を始め10月初旬には28名全員が内定いたしました。インターンシップ企業の選定は、指導員が行い、契約は学務課が行いました。インターンシップは集中実習中に取り組む校の方針がありましたので、夏季と冬季の集中実習期間を中心として計画いたしました。夏季は就職内定者のみ、内定企業・企業からの要望を受け開発課題を実施している企業・在職者訓練で本校を利用していただいている企業をお願いいたしました。就職活動中の学生は、夏季期間は就職活動に専念させました。インターンシップが就職に結びついた学生は1名です。県外就職、通勤手段がない寮生などのインターンシップ先の確保が苦勞いたしました。巡回指導には、指導員が行き学生の様子、企業との意見交換などを行い、本校の目的と学生の仕上がり像を確認しています。学生の職場体験内容は、内定先での各部署の生産活動・精密機械のリニアガイド(約2000mm長)の組立調整・部品加工・CAD作業・金型製作補助・開発課題の検証・生産工程票作成補助・配線作業・設計企画の補助などをいたしました。学生の感想を要約しますと、実社会でのインターンシップを通じて、機械関連事業に関する設計・加工・生産管理などの各種業務内容の実際を理解するとともに、自分の目

で勉強することが多く、自分の力となりました。今回のインターンシップにより多くのことを学べ、よき経験になったと考えます。普段の学生生活では得ることのない社会と会社というものをほんの少しかもしれませんが学べたと思います。会社では自分の決まった役割をどれだけきっちりこなすか、これが本当に重要なことだと思いました。学生などのなかなあでは全くダメであることが良くわかり勉強になりました。

毎日、当たり前のように働かれていることも実はとても大変な業務の繰り返しだと気づいた学生、会社全体で安全に務めているのを見て、非常に社員教育が行き届いていると感じた学生もいました。

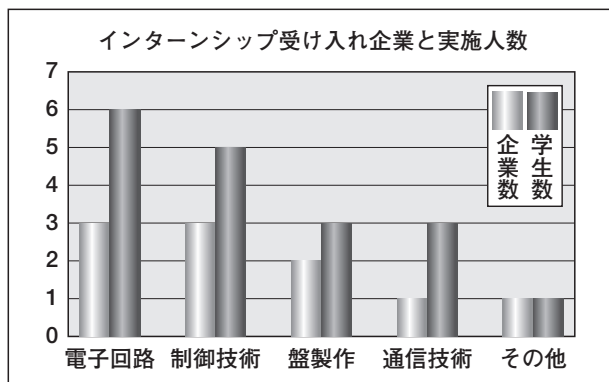
また、機械関連の知識も多く学ぶことができ、自分にとって「仕事」とは何かを考える機会を得られ自分の気持ち・やる気次第で仕事のやり方・可能性が広がること、自然にできる人に対しての心遣いやcommunicationの方法など自分の視野を広げることができプラスになったと思います。結果的に就職のためのインターンシップではなく、人間的成長のためのインターンシップでした。

■応用課程 生産電子システム技術科

生産電子システム技術科における本年度のインターンシップは、夏休み前における集中実習期間を利用して、17名が実施をした。また夏休み明けに1名実施し、現在在籍学生20名中18名の実施、実施率90%となっている。未実施の学生2名は12月の集中実習期間を利用して実施することとなっており、100%の実施率を達成する予定である。

受け入れ先企業の選定は、昨年度インターンシップ実績がある企業や学生の就職先約200社を対象に、アンケートを実施した。しかし、生産電子システム技術科の学生の受け入れ可能企業は6社しかなく、6月に企業訪問を実施して、受け入れ先企業の確保に取り組んだ。最終的に受け入れ先企業は10社で、能力開発セミナーや企業人スクールなどの能力開発業務で付き合いのある企業および昨年度までの卒業

生が就職した企業が6社（内1社は本年度の学生の就職内定先）、残り4社は昨年度インターンシップの実績がある企業である。受け入れ先企業の職種の内訳および職種別の受け入れ学生数の結果を下図に示す。



インターンシップの目的は、企業現場の体験を通して、講義、実験・実習だけでは習得することが困難な知識・技術・心構え等を習得することである。さらにインターンシップを通して、企業に能開大の学生をみていただき、企業の求人結びつけることも重要である。今回インターンシップの実施時期が7月後半ということもあり、18人中14名はインターンシップ実施前にすでに就職先が内定していた。しかし残り4名の学生については、インターンシップの実施を条件に採用を考える企業が2社あり、内1名は今回のインターンシップにより、採用に至った。この件について好事例として述べる。

◇好事例

協同組合グリーンテクノ（岡山県浅口郡里庄町）は製造業を中心とする12社で構成された異業種団体で、平成6年4月に設立された新しい団体である。当団体と本校のつながりは、昨年度卒業生1名が団体傘下企業に就職しているものの、能力開発事業においてはあまりつながりを持っていなかった。しかし本年度応用課程開発課題のテーマとして、傘下企業2社からいただいており、また来年度以降の能力開発事業のターゲットとしている。

当団体の傘下企業である中国システム株式会社は、



中国システム(株)工場内の風景

LEDを利用した電飾装置の電子回路基板を設計・製作を行っている企業である。

今回この企業に2名の学生を派遣した。1名はすでに他社に内定済み、1名は内定が決まっていない状態であったが、インターンシップの実施を条件に、この1名の採用を検討していただくこととなった。インターンシップでの作業内容は、LED電飾基板の検査を自動で行う装置を設計するもので、学生にとって、10日間の実習としては非常に難しいテーマであった。当然のことながら、製品完成とはならなかったが、基本仕様をまとめるまでには至った。現在当社ではこの仕様書に基づき、製品開発に取り組んでいる。この結果、この学生は当社の社長が経営する山本電器株式会社に採用されることとなった。

協同組合グリーンテクノでは、このインターンシップの最終日に組合傘下企業に集まっていたが、報告会を開催する予定であったが、各社の時間の都合がつかず、今回は実施されなかった。しかし当組合の当校に対する期待は大きく、今後もインターンシップのみならず、各種能力開発事業が展開できるよう取り組んでいかなければならない。

■応用課程 生産情報システム技術科

情報システムの分野は他系と異なり、いわゆる「ものづくり（製造）」の現場が存在しないため、就職先も設計・開発の職種が主となります。したがって、インターンシップ先もシステム開発の現場が第一のターゲットとなりますが、即戦力としての能力

を要求されるこのような現場で実習を受け入れていただくのは現実にはきわめて困難です。

とはいえ、就職先分野とは異なる場での実習はアルバイトと何ら変わらない体験になりかねず、単なる形だけのものに終わってしまいます。大部分の学生がアルバイトを体験している現状を考えれば、このような実習はあえて行う必要もなく、加えてインターンシップの本来の趣旨とは程遠いものになってしまう。

当科ではこれらの兼ね合いを考慮し、学んだカリキュラムの内容ができるだけ生かせる分野での実習先を検討しました。結果として昨年度ならびに今年度は2年次の学生の内定先での実習や開発課題でタイアップしている企業での実習がそれなりの位置を占めています。

開発課題との連携はともかく、内定先での実習はインターンシップの本来の趣旨を考えれば本末転倒となりますが、2年次の学生を対象とすればタイミング的にはやむを得ない選択肢となってしまいます。そこで、今年度は就職活動が本格化する前の1年次の学生も試験的に参加させ、就職活動に結びつける本来のインターンシップとして定着させるための取り組みも行いました。効果が高いようであれば次年度以降積極的に進めていきたいと考えています。

参考までに昨年度（実績）、今年度（実績ならびに予定）を以下に報告いたします。

卒業(予定)年度	在籍数	内定先	開発課題連携企業	情報システム関連	その他	計(実施率)
2003	22	2	2	11	5	20(91%)
2004	18	5	3	8	2	18(100%)
2005	22				2	2(9%)

■専門課程 生産技術科

◇今年度の方針

今年度の2年生は総数21名で、7月末の集中実習（総合制作実習）において全員実施することを目標に、5月から受け入れ企業を前年度実施していただいた

企業を中心に受け入れをお願いしました。また、就職希望者が21名中15名（6名応用課程希望）あり、その時点での就職内定者は内定企業への受け入れ、個々の就職希望企業に対しても受け入れをお願いしました。

◇受け入れ企業

受け入れ可能企業が約20社、受け入れ可能人数が約40名に上りました。その内訳が下記のとおりです。今後は学生の就職希望企業に対する働きかけを年度当初より積極的に実施し、増やしていかなければならないであろう。

機械加工製造業17社

（就職内定企業2社、就職希望企業1社）

機械システム設計製造2社

事務機器販売1社

◇学生の振り分け

就職内定者に対し受け入れていただけた企業が2社あり、この2社にそれぞれ地元の学生を含めた2名ずつをお願いしました。また、就職希望企業へ2名その他は通勤を考慮したうえで、インターンシップ企業を指示しました。

◇事例

内定企業へのインターンシップでは、企業側そして学生も翌年の4月からの勤務を想定したカリキュラムで実施したことで、学生は仕事内容を把握し、残りの学生生活の中での重点的に取り組むものがつかめました。

また、就職希望がある学生を受け入れていただいた企業には、インターンシップ期間中に学生の高い能力を評価していただき、終了後間もなく採用試験、即内定といった事例がありました。

■専門課程 電子技術科

電子技術科2年生は25名で、そのうち応用課程の進学者数14名、就職希望者数11名となっている。平成16年11月までに就職希望者11名が全員就職を決めている。就職内定者のうち、内定企業へのインターンシップは8名（予定者含む）となっており、内定

企業へのインターンシップが大半を占めている。また、就職内定者以外のインターンシップ委託企業は、学生から電気・電子関連で希望の業務や希望地のアンケートをとり、昨年のインターンシップ委託企業・卒業生の就職先・新規開拓も含め電子技術科の全職員が企業訪問を行い、委託先を決めた。

電子技術科において、就職希望者のインターンシップの目的を、入社前に内定企業の業務を少しでも経験することによって、必要となる能力の習得意欲を喚起し、今後の目標を見つけ、残る学生生活を有意義に過ごすためとした。

また、応用課程進学者に対しては、企業での生産活動を行ううえでの安全に関する取り組みや品質向上の取り組み等を体験、あるいは見学することで、応用課程での開発課題に取り組むうえでの意識を高めてもらうこととした。

ここで、内定企業（シャープ株式会社IC事業本部）でインターンシップを実施した学生における実習内容、関係者の意見、感想等を示す。

シャープ株式会社IC事業本部は広島県福山市に位置し、集積回路（LSI・IC）の開発および生産技術を行っており、シャープ株式会社におけるIC関連事業の中心的役割を担っている事業所である。内定が決まっている学生は生産技術にかかわる職務を行うことになっている。

実習期間は9月6日～17日の2週間で、IC製造プロセス概要・安全教育・製造ライン見学・測定装置オペレーション・フォトリソ工程のプロセス条件出しなど、目的・評価・結果・結論に至る一連の過程を実習するものであった。実習担当者の意見として、採用者の技術的能力の把握、または適性が少しでも判断できたとの意見をいただいている。学生においては、企業の生産活動における意識の高さを実感し、自分に足りないと感じた点を残りの学生生活で補うようにしたいと感想を述べている。また、ほとんどの学生が同様の感想を述べており、当初のインターンシップの目的を達成したものと考えている。

付け加えて、中国校内定者2名、島根校1名・福山

校1名の内定者も同時期に実施した。

■専門課程 情報技術科

去年からスタートしたインターンシップだが、平成16年度の情報技術科の目標としては、100%の実施（専門課程2年生）、企業側と学生がお互い満足できるインターンシップを実施することを掲げ、全力で取り組んできた。そのかいもあって、現時点での実施率は、見込みを含めると90%という状況であり、企業および学生の満足度も高いものとなっている。

情報技術科でのインターンシップの取り組みスタイルは、2年生の担任が中心となって取り組むというものである。ただし、インターンシップに取り組んできた前年度の担任や企画委員もバックアップを行ってきた。

企業の選定方法としては、去年、インターンシップを実施していただいた企業、就職内定先企業、当校と関係の深い企業にターゲットを絞った。ただ、一番期待の持てる就職内定先企業でのインターンシップについては、こちら側で予定していたインターンシップの実施時期と就職内定の時期がうまく噛み合わず、苦戦を強いられることもあったが、多くの学生を快く引き受けてくれた企業、さらに別の企業を紹介してくださった企業、当校でオーダーセミナーを実施してきた企業などのお力添えもあり、多くの学生に対してインターンシップを実施することができた。

各企業でのインターンシップの取り組み状況を拝見させていただいたなかで、私自身が一番印象に残った企業は、今年度、情報技術科から2名もの内定をいただき、内定者に加えて応用課程進学者2名をインターンシップとして受け入れてくださった企業である。こちらの企業では、内定者に対しては実際のシステム開発部に入ってもらい、データベースを利用したシステム開発を一通り体験させていただいた。来年度4月からは、早速、あるプロジェクトに参加してもらおうとのことで、双方にとってとても有意義なインターンシップであったと思われる。また、

進学者の2名に対しては、パソコンインストラクターの補助業務等を通して、働くことの意義を学び、自分の適性を考える機会を与えてもらったのではないかと思う。

これまでの活動を振り返ってみると、やはり、就職内定先企業でのインターンシップに関しては、ほぼ確実に実施することができる。しかし、応用課程進学と就職組とに分かれるため、就職内定先企業にすべてを頼ることはできない。また、当校に対して理解のある企業での実施率も高いものとなっているため、より多くの企業との強い関係を築いていくことが、インターンシップを成功させる鍵になるのではないかと思われる。

問題点としては、学生がインターンシップでやってみたいことと、実際のインターンシップでの内容にミスマッチが生じてしまうことがあげられる。これに関しては、企業との調整を綿密に行うことが必要と思われる。

現時点では、100%の実施率には届いていない状況である。これからも気を抜かず、双方とも満足のできるインターンシップを実施できるよう、精いっぱい努力していきたい。

3. まとめ

各科の取り組みを紹介しましたが、インターンシップを実施して、企業・学生・職員に多くの実りをもたらしたことは事実です。

企業が何を考え、何を望んでいるか職員が肌で感じたことと思います。

改善点等は多々ありますが、1年1年好事例を積み上げ、就職・セミナー・企業人スクール・共同研究等にリンクし能開大の信用信頼を得、ステップアップできればと願うところです。